

「うはなり」「こなみ」の諸相 (2)

—鎌倉、室町、江戸時代を中心に—

Various phases of “Uhanari” and “Konami” (2)
—Focusing on the Kamakura, Muromachi and Edo Period—

片山 剛¹

要旨

鎌倉時代の説話集、室町時代の謡曲、物語を中心に「うはなり」と「こなみ」の嫉妬や「うはなり打ち」がどのように文学作品に描かれているかを探る。「うはなり打ち」は先妻による後妻への暴力という意味を超えて用いられることや嫉妬の苦しみを救済する仏教の力などに注目する。また、江戸時代になると「うはなり打ち」はおこなわれなくなったようだが、過去のものとして「うはなり打ち」をどのように見ていたかを考えてみる。

キーワード：先妻、後妻、嫉妬、諍い、鎌倉時代以降

First Wives, Second Wives, Jealousy, Conflict, After Kamakura period

はじめに

筆者は、前稿¹⁾において平安時代の「うはなり」と「こなみ」の諸相について、桃裕行氏²⁾、大間知篤三氏³⁾、川口素生氏⁴⁾らに導かれつつ、いくらかの考えを示した。

史実としては、藤原道長の『御堂関白記』や藤原行成の『権記』などに記される、大中臣輔親の妻、蔵命婦の二度に及ぶ「うはなり打ち」があった。また、鎌倉時代になるが、『吾妻鏡』の記す、源頼朝の妻、北条政子の「うはなり打ち」とその陰に見え隠れする政子の継母牧の方の動きについても触れた。

歴史物語では、歴史上の人物が登場しながらも、史実そのままとはいえない場合もあり、また日記文学では筆者の主観がかなり色濃く出るため、事実と虚構のはざまが描かれているとみなすべきかもしれない。一方、完全な虚構である物語については、それが虚構であるからといって荒唐無稽なものと決めてかかるのは正しくない。その意味もあって、前稿では『源氏物語』『伊勢物語』なども積極的に取り上げたのであった。

本稿ではそれに続いて鎌倉時代以降の「こなみ」と「うはなり」について、その実態をさぐりつつ、

しかしもっぱら、さまざまなジャンルの文学作品がそれらをどのように扱っていったのかについて関心を抱きながら述べていくことにする。

1 『新猿楽記』の三人の妻

その前に、もうひとつ平安時代の文献に触れておきたい。

11世紀半ばに藤原明衡によって書かれたと思われる『新猿楽記』⁵⁾は、猿楽諸芸そのもののほかに、見物に出かけた右衛門尉という人物の家族について述べたものである。この一家は大家族で、三人の妻に娘十六人、息子九人、さらにはその配偶者もあるという。では、その三人の妻には「うはなり妬み」はあったのだろうか。

最初の妻はすでに六十歳を超えて、夫（右衛門尉）より二十年ほど年長。すでに髪は白く、歯は欠け落ち、「極寒月夜」（十二月の月）のように誰にも相手にされないような容貌だという。ところが自分の衰えを悟らずに今なお夫の愛を欲し、聖天（歓喜天。夫婦円満や恋愛成就の利益がある）を本尊としたり、道祖神（男根をかたどる石を祭ることが多い）を持仏のように持ったりしている。そして「嫉妬驗如毒蛇之繞乱、忿怒面似悪鬼之睚眦（嫉

1 Takeshi KATAYAMA 千里金蘭大学 教養教育センター

受理日：2018年9月7日

妬の臉は毒蛇の繞乱するが如く、忿怒の面は悪鬼の睚眦に似る)」とあって、自分の老醜を顧みず、かなり嫉妬深い様子が記され、あげくには「生作大毒蛇之身（生きながら大毒蛇の身となれり）」とまで酷評されるのである。

では三人の妻になぜさほどの争いが無いのかというとそれはあとの二人の妻の性格によるところが大きいようである。

第二の妻は夫と同年で、「心操調和、如水随器（心操調和して水の器に随ふが如し）」とあるように心が穏やかな人であった。裁縫、料理、染張りほかあらゆる家事に長けており、おそらく第一の妻にとっては妬ましいという以前にありがたい存在であっただろう。

第三の妻は権力者の縁者で、十八歳の若さとまれにみる美貌を誇る。世情には疎く、「養沈淪窮屈之性、罷世路喧囂之思（沈淪窮屈の性を養ひ、世路喧囂の思ひを罷む）」という、イージーゴーイングというか、気楽というか、何事にも動じない性格だという。夫の寵愛はすさまじく、この妻のためなら水も火も風も雨もものともしないのである。となるとほかの妻の嫉妬の対象になりそうだが、なんといっても実家の力があるうえに、物怖じしない性格だけに前妻たちは嫉妬しにくく、またしがいもなかったのだろう。おまけに夫は「於両妻嫉妬塞耳（両妻の嫉妬に於いては耳を塞ぐ）」という態度を決め込むのである。つまり前妻たちから嫉妬されようともこの若妻の気質がそれらをものともせず、また夫は知らん顔なので、嫉妬しても糠に釘をうつようなものだったのだろう。

2 説話集の「うはなり」「こなみ」

前稿では平安時代の説話集である『今昔物語集』についてはいくらか述べたが、本稿ではそれ以降の説話集を取り上げたい。

『発心集』巻五の三に「母、娘を妬み、手の指蛇（くちなは）に成る事」がある。ある男の妻は年配で、連れ子の娘がいる。女がある日突然「自分は年を取っているの、念仏などして暮らしたい。今後は娘を妻にしてほしい」と言い出す。夫も娘も驚いたが、その通りにする。二人は本妻（母）を大事にしたが、夫が留守のあるとき、後妻（娘）が話をしに行くと気分が悪そうである。よくよく聞いたところ「自分の考えでしたことなのに、夜の寝覚めなど寂しいことがある、また、あなたたち

を見ていると胸が騒ぐ。これは罪なのか、あきれるようなことが起こった」といって手を見せると、親指が二本、蛇になっていた。娘は目がくらみすぐに出家し、帰ってきた夫も驚いて出家、本妻も同様に出家した。するとやがて指は元のとおりになった、というのである⁶⁾。そして筆者はこのあとに

女のならひ、人をそねみ、ものをねたむ心により、多くは罪深き報ひを得るなり。なかなかかやうにあらはれぬことは、悔いかへして罪滅ぶる方もありぬべし。

と言う。妬み心などによって、身体（またはその一部）が蛇になるとか来世で蛇に生まれるという話は説話集にはしばしば見られる⁷⁾が、表に出ることによってかえって罪障が減することもある、というのである。

この話は、本妻が夫と新しい妻を妬むという意味では「うはなり妬み」の系譜に入るだろうが、その新しい妻が自分の実の子であり、また自分の本願として隠居生活をしたと思っていたのに、なおも抑えきれない嫉妬があるという人間の妄執を描いた点で深みのある話となっている。また、「うはなり妬み」の結果、当事者（妻の場合も夫の場合もある）が発心することで何らかの救いを得るという話はこの後しばしばあらわれる。

これは「うはなり妬み」ではないが、『閑居友』下に「恨み深き女、生きながら鬼になる事」という話がある。ある男が、美濃国の女と親しくなったが、住まいが離れているため心ならずもなかなか訪れることができなかった。女はそういう事情もわからず、男がつれなくなったものと思って、まれに逢うときも恨みをあらわにしたため、男は恐れて訪ねなくなる。すると女は何も食べなくなり、襖を閉ざして衾をかぶってばかりいたが、自分の髪を結い上げて飴（水あめ）で固めて五本の角（つの）のようにした。そして紅の袴を着けて、ある夜、こっそり姿をくらます。30年ほど後、野中の堂の天井裏に鬼が住むという噂が広まったので、人々が火をつけると中から五本の角を生やし、紅の裳を着けた恐ろしいものが現れ「自分は誰その娘だが、恨み心を持ってこういう姿になって男を殺した。すると元の姿に戻れなくなり、ここにいるのだ。『法華経』を書写して供養してほしい。また、妻子のある人は、こういう心を持つなど言い広めてほしい」と言って火に飛び込んで焼死した。

何らかの心の乱れが女を異形のものに変じさせ

たという意味では先述の『発心集』その他の蛇の話と共通する。この女は男の訪れの少ない事情を誤解して激しく恨み、その結果、現代なら「ひきこもり」といわれる生活に陥り、五本の角に紅の袴（裳）といういでたちで姿をくらまし、男を殺害するに至ったのである。ただ、鬼の姿から戻れないこともあって後悔の念が強まり、地獄の業火に焼かれるかのような凄惨な最期を遂げるのである。なお、『法華経』の書写を頼んでいるのは提婆達多品に見える女人成仏の考えの反映であろうか。

ところで、髪を結い上げて飴で固めて五本の角のようにするというのは『平家物語剣の巻』⁸⁾にもみられる。こちらは嵯峨天皇の御代という時代設定で、ある公卿の娘がひどくもの妬みをする人で、貴船明神に詣でて「生ナガラ鬼ニナシテタビ候へ。妬シト思フ女ヲ取殺サム」と願い、大明神は「姿ヲ替テ宇治ノ川瀬ニ行テ三七日（二十一日間）ヒタレ、サラバ鬼ニナサン」と答える。すると女は都に戻って「人ナキ処ニタテゴモリテ、タケナル髪ヲ五二分ケテ糖ヲ塗テ巻上テ五ノ角ニゾ作りケル」というのである。『閑居友』と違ってこちらは妬む女を殺したいというのだが、身を潜めてみずからを鬼の姿に作り上げるところはきわめてよく似た描写で、謡曲の「鉄輪」に通ずる激しい情念の込め方である。

『平家物語剣の巻』のこの話はよく知られたものであったらしく、「鉄輪」への影響のほか、室町時代物語「火桶の草紙」でも、姥が「女性の嫉妬はよくあることだ」という例として『源氏物語』の六条御息所とともにこの話を挙げている（後述）。

なお、『閑居友』に見える、鬼に変装したものの、元に戻れなくなるという展開は、これも後述する室町時代物語の「磯崎」にも見られるものである。

『沙石集』巻九の一「嫉妬の心無き人の事」は九つの話を集めたもので、その最初の話は次のようなものである。

ある殿上人が田舎下りのついでに遊女を連れて帰洛する。妻に「不愉快だろうから出て行ってくれ」というと、妻はいやなそぶりも見せずに遊女を歓迎する準備をして自分は出て行った。遊女はそれを知って、殿上人に「畏れ多いので奥様を連れ戻して、私は別のところに置いてください」と頼む。殿上人はもっともなことだと思って妻を呼び返し、その後、妻と遊女は心に隔てなく過ごした。

この「うはなり」は男が田舎下りをしたときに出会った遊女なので、都の殿上人の正妻に対して

は劣等感を持って当然の立場であろう。言い換えると妻は圧倒的に優位な立場にあるはずである。しかしそこでその優位性を誇示したり相手を見下げたりせずに対応したことが遊女の心を動かしたのであろう。また「うはなり」の遊女も「心ある者にて」とあるとおり、謙虚にふるまうことを心得た者であった。この話からは、前稿で触れた『大和物語』141段が思い出される。それは筑紫から上ってきた「うはなり」を「こなみ」が優しく遇して同居する話であったが、都の「こなみ」と田舎の「うはなり」という状況は前述の『沙石集』と共通するものである。そして『大和物語』では「こなみ」を「いと心よき人」であったと記している。

同じ「嫉妬の心無き人の事」にはこういう話もある。

遠江国のある人妻が離縁されることになり馬に乗って出ようとする時、「人の妻の去らるる時は、家の中のもの、心に任せて取る習ひ」だということで、夫が「何物にても取り給へ」という。すると妻は「殿ほどの大事の人をうち捨ててゆく体の身の、何物か欲しかるべき」とにっこり笑って憎らしげではない言い方をしたので夫は妻をいとおしく思って生涯連れ添ったという。この話は「人に憎まるるも思はるるも先世の事と云ひながら、心ごまによるべし」と結ばれている。前世からの因縁とはいいながら、やはり気立て次第で人に思われたり憎まれたりするということのである。

なお、小島孝之氏も指摘されている⁹⁾ように、『グリム童話』¹⁰⁾によく似た話がある。王妃となった農民の娘が王に疎まれて追い出されるときに「一番好きで、一番大切なものを持って出ていけ」と言われる。王妃は、王に強い酒を飲ませて眠らせたうえで連れ出し、目を覚ました王は王妃の「一番大切なあなたを連れ出した」ということばに感動して二人はまた共に暮らすのである。

「嫉妬の心無き人の事」からもうひとつ挙げておく。

ある男が本妻を家に置いたまま別の妻を迎えた。秋の夜、鹿の鳴く声が聞こえたので、男は本妻に「あの声を聞いていますか」と問うと、本妻は「我も泣きそ人恋ひられし今こそよそに声ばかり聞け」（私もあの鹿のように泣いてあなたに恋をされたのですが、今は離れたところで声だけを聞いています）と詠んだ。男は「わりなく覚えて」新しい妻をその実家に帰して元のさやに納まった。

この話については「嫉妬の心深くして情けなく

ば、かくあらかし。ただそねみ、ねたまず、あ
たをむすばずしてまめやかに色深くば、おのづか
らしもあるべきにや」と記され、真摯で雅びの姿
勢を持てば自然にうまくいくのだというのである。
沙（砂）や石のようなつまらぬものを素材にして
金玉のごとき仏の道を説く『沙石集』らしい教訓
であろう。

なお、『沙石集』「嫉妬の心無き人の事」には間
男を許す男の話もある。

嫉妬の心がなければ何らかの試練があろうとも
それは克服される、という主題のあとに『沙石集』
はその逆の陰惨な話も書き留める。巻九の六「嫉
妬の故に人を損じ酬ふ事」は誰ひとり幸福になれ
ない次のような話である。

ある公卿の北の方が、夫の思い人に嫉妬して、
その女のところに「殿（夫）のご命令だから」と偽っ
て車をよこす。そして女を連れてきて一間に押し
込め、火熨斗（ひのし。現在のアイロンに当たる
もの）に火を入れて懐妊している女の腹に当てた
ので、女の腹は焼けただれて肉が見えるほどになっ
た。わずかに息があるうちに女をその母親のもと
に送り返したが、女は間もなく亡くなる。母親は
狂乱して諸社に詣でて「仇をとってほしい」を喚
き叫ぶが、まもなく思い死にしてしまう。ところが、
その霊が北の方にとり憑いて、北の方は体が脹れ
る病になって苦しんだあげくに亡くなる。

きわめて悲惨な話だが、悲惨といえば『閑居友』
上の二十一「唐橋瓦の女の屍の事」にも、河原に
バラバラにされた女の屍が放置されている話がある。
被害者は十九歳の女で、みずからの女主人の
夫と忍び逢いをしたことが女主人に知られる。女
主人は激しく嫉妬し、夫が外出しているときに「さ
まざまのほかり事を構へて、いひ知らず言葉も及
ばぬ事どもして」こっそり捨てさせたのだという。

こういう悲惨な仕打ちをする人物としては漢の
高祖（劉邦）の後であった呂雉（呂太后）にとど
めをさすであろう。

『十訓抄』第八は「可堪忍于諸事事」を説くが、
その六話に

もろこしに呂后ときこえたまふ后は、戚夫人
といひけるうはなりをとらへて、いひしらぬ
うたてきありさまにしなされにけるなどきこ
ゆれば、まして次々の人の振舞はことわりと
いひつべし

と、あまり詳細ではない形で記している。『史記』
「呂后本紀」の記す呂太后の戚夫人への仕打ちは、

目耳喉をつぶして厠に投げ込んで「人彘」と呼ば
せるという、残忍極まりないものであった。ここ
で忘れてならないのは、そもそも呂太后と戚夫人
の対立は、それぞれの子である劉盈（のちの恵
帝）と劉如意のいずれを高祖の後継とするかとい
う争いにあったことである。嫡子の劉盈は温和に
過ぎ、高祖の心はむしろ劉如意に傾いていたため、
呂太后は不安を余儀なくされ、戚夫人母子を敵対
視せざるを得なかった。そして高祖亡き後、かろ
うじてわが子が恵帝となるや、呂太后は後継者と
しての劉如意の息の根を止めるべく殺害に踏み切
り、さらに戚夫人を上記のような方法で殺したの
であった。しかし『十訓抄』は「戚夫人といひけ
るうはなりを」という書き方をしており、「可堪忍
于諸事事」というテーマに沿って、あたかもこれ
は「うはなりねたま」のなせるわざであるかのよ
うに述べている。そして「次々の人の振舞（后以
下の身分の者のおこない）」はどれほどひどいもの
かと、「もろこし」の「うはなり妬み」のすさまじ
さを説いているようである。

同じ『十訓抄』第八の四話は

また、女のものねたま、同じく忍びつつしむ
べし。いやしきはいはず、ことよろしき人
の中にも、このかたのすすむにつけては、むく
つけくなくうたてき名を遺すなり。なかにも
后は螽斯、毛詩の喩おはしましき。ものねた
みし給はぬこと、本文に見えたれどもそれし
もえしのび給はず。

と書き始め、このあと前稿で取り上げた村上天皇
中宮安子の宣耀殿女御芳子への嫉妬について述べ
る。呂太后の話はさらにこの後に書かれているの
である。なお、螽斯（しゅうし。イナゴの類）と
後の嫉妬の関係については前稿で述べた。

このように、中世の仏教説話集は「うはなり」「こ
なみ」を中心に嫉妬を忌避すべき罪深く醜いもの
として指弾しつつ、『発心集』巻五の三の、娘をね
たむ母に見られるような、善悪を超えた人間の妄
執を描くものもあった。

3 謡曲の「うはなり」「こなみ」

人間の妄執を描くものという、謡曲を忘れる
わけにはいかない。そして、謡曲で「うはなり」
「こなみ」にかかわるもっとも有名なものは「葵上」
と「鉄輪」であろう。

『源氏物語』「葵」に取材した「葵上」は、物の

怪に憑かれた葵上（舞台には登場せず、出小袖で表現）を救おうと、梓の法をおこなう照日巫女（ツレ）がその正体を明らかにすると、六条御息所の霊（前シテ）が現れる。霊は車争いに敗れてつらい思いをしていることを訴え、制止を振り切って葵上を激しく打つ。御息所の霊はいったん姿を消し、新たに横川の小聖（ワキ）が祈祷のために呼ばれる。霊（後シテ）は再度現れて小聖と戦うが、ついに法力によって解脱する。

御息所の霊は照日巫女と対峙して「かかる恨みを晴らさんとてこれまで現れ出でたるなり」と言い、心を高揚させると「あら恨めしや、今は打たでは叶ひ候ふまじ」と葵上（出小袖）に近づく。そのとき照日巫女は「あら浅ましや。六条の御息所程の御身にて、うはなり打ちの御振舞。いかでさる事の候ふべき。ただ思し召し止まり給へ」（本来は青女房のせりふ）と制止しようとするのである。

原作の『源氏物語』に立ち戻るなら、葵上は光源氏が十二歳のときに結婚した正妻であり、理屈からいうと六条御息所こそがむしろ「うはなり」なのである。その意味では、車争いで葵上が（直接手を下すわけではないが）六条御息所を虐げた行為こそが「うはなり打ち」ともいえる。しかし、出産直前で身体的に弱い立場にある葵上を苦しめる六条御息所の霊の暴行は、まさに「うはなり打ちの御振舞」というにふさわしいものなのだろう。ここではどちらが前妻でどちらが後妻かということとはもはや問題ではない。むしろ「うはなり打ち」という言葉が「強い立場の妻が弱い立場のもう一人の妻を一方的に攻撃すること」という新たな意味を獲得したことを感じさせるのである。

「鉄輪」もまた激しい「うはなり打ち」が描かれた作品である。

貴船神社の神職（アイ）に「毎夜参詣に来る女（前シテ。別の女のもとに去った夫を恨んでいる）に『鬼になりたいなら赤い衣を着け、顔を赤く塗り、頭に鉄輪を載せてその足に火をともして怒りの心を持って』と伝えよ」という神の託宣がある。神職に声をかけられた女は身に覚えがないといいながら、形相が変わって髪が逆立ち、雷鳴轟く中を鬼になってやろうと決意して帰っていく。夫（ワキツレ）は最近夢にうなされがちなので安倍晴明（ワキ）に占いを頼む。すると、女の恨みで、今夜にも命が危うく、もはや調伏はできない、という。夫の懇願を受けた晴明は茅の人形を作って夫と後妻の名を中に籠めて祈った。やがて鬼となった前妻（後

シテ）が現れ、夫の人形に恨みを述べつつ今夜限りの命を哀れむ気持ちも持つ。そして後妻の人形をさんざんに打ち据え、夫の人形を取ろうとすると神が現れて前妻の神通力は絶えてしまう。前妻はこのたびは帰ろうとって姿を消す。

貴船神社の託宣によって鬼と変じて恨みを晴らすとするなど、当時よく知られていたと思われる『平家物語剣の巻』から何らかの影響を受けているのであろうが、託宣の内容は異なっている。また、夫を恨むといいながら、今夜限りの命というのはさすがに不憫だと思ふところが女の心の深層を描いてやまないであろう。その一方、後妻に対しては

命をとらむと筈（しもと）を振り上げ、うはなりの髪を手にかまいて、打つや宇津の山の夢うつつともわかざる憂き世に、因果は廻りあひたり

と、したたかに責め立てるというのも「うはなり打ち」の本質を突いているといえるのではなかろうか。

「葵上」も「鉄輪」も、男に対しては未練を持ちつつ、「うはなり」に向き合うと堰を切ったように憎しみがあふれ、理性を超えて打ち据える。鬼に変じたからこそできる、言い換えると鬼にならなければできない荒々しい行為である。心の奥で恨みを醸成させている段階から「うはなり打ち」という具体的な行為に出るためには、『閑居友』『恨み深き女、生きながら鬼になる事』や『平家物語剣の巻』にも見えた、「鬼の姿に変ずる」ことが不可欠だったのであろう。

「藍染川」は妻の嫉妬がもたらす悲劇でありながら、ハッピーエンドを迎えることもあって、いささか趣を異にする。

京の一条今出川に、もとは梅壺侍従として内裏に仕えたことのある女（前シテ）が住んでいた。彼女は筑紫から上ってきた神官の中務頼澄と「あだなる契り」をするが、頼澄は筑紫に帰ってしまう。梅壺は、二人の間に生まれた梅千世（子方）を頼澄に合わせようとして、梅千世を伴って筑紫に行く。頼澄の家来の左近尉（ワキツレ）という人物に偶然出会い、手紙を託すが、それは頼澄の妻（アイ）の手に渡る。妻は腹を立てて「女一人でこんなところまで来ることはできまい。男と一緒にだろうから会うことはない」という偽の返事を渡す。梅壺は絶望して梅千世を残して藍染川に身を投げてしまう。頼澄（ワキ）が外出先から戻り、藍染

川で左近尉からわけを聞き、「子を跡継ぎにしてほしい。できないなら出家させて面倒を見てほしい」という梅壺（後半は出小袖で表現される）の遺書を読み、梅千世に後を継がせることを誓う。そして天満天神に祈ると神殿が鳴動して天満天神（後シテ）が出現し、天神は梅壺を蘇生させる。

大宰府の神官が京に上ったときにかりそめの契りを結んだ女がわが子のために筑紫まで行くが、男の妻の詭計にはまって身投げするというストーリー性の濃い作品で、それだけに謡曲としてはやや魅力に欠ける感がある。妻はアイで、主要人物ではなく、単純な人物造形にとどまり、嫉妬の描写もほとんどないといってよい。むしろ、二通の手紙（筑紫の妻の偽りの手紙と、梅壺の子を思って頼澄に訴える遺書）がもたらした明暗というか、前者に比して後者がどれほど強く頼澄、ひいては読者、観客（見者）の心を打つかポイントといえようか。妻の嫉妬はあくまでも梅壺のひたむきに子进行う心を浮き彫りにするきっかけに過ぎない。

佐成謙太郎氏は「後妻が嫉妬して詭計を用い、前妻をして死に至らしめる」¹¹⁾として、筑紫の妻は後妻と考えているが、本文に特にそういう記述はない。むしろ、筑紫の男が都で女と知り合ったというなら、彼の本拠にいる妻が前妻であってもよいし、むしろここではどちらが前妻かということとは問題ではないのである。「鉄輪」のように明らかに前妻が後妻を責めるものもあるが、「葵上」や後述する「三山」なども前妻、後妻という関係は問題外なのである。

この作品はのちに室町時代物語の「藍染川」となり、内容はほぼ同じだが、女の蘇生ののち、頼澄が「北の方」が偽りの文を書いたことに対して「かく邪見なる女とも知らで過ぎにしくやしきよ。ひとへにこれは北の方のいつはりのなすところなれば、報いの罪にまかせつつ命を取らん」と激しく怒る。すると梅千世が「おほせはさにて候へども、女はたかきもいやしきも嫉妬の深きものなれば、憎みてもまた憎からず。あたを恩にし、報じ給はば、さこそ仏神三宝の御心にもかなふべし。北の方の命をばそれがしに給はれ」と大人びたことを言う。頼澄の妻を「北の方」と呼んでいるところから、梅壺への仕打ちは「うはなり妬み」によるものであるというニュアンスが感じ取れなくもない¹²⁾。

物語は、謡曲の内容にこの結末を書き加えるこ

とで、双葉にしてすでに芳しい梅千世のすぐれた見識を強調するのだが、それと同時に妻の悪意を際立たせることにもなっているだろう。なお、物語ではこのあと菅原道真の話が続く。

大和三山を素材にした「三山」にも一風変わった「うはなり打ち」がある。

大原の良忍上人（ワキ）が耳成山で里の女（前シテ）に会い、三山の物語を聞く。公成という香具山の男が、畝傍山の桜子と耳成山の桂子を愛しながら、次第に桜子になびき、桂子は耳成山の池に身を投げた、というのである。里の女は回向してほしいと言ってやはり池に入る。良忍が回向しようとする、桜子の霊（ツレ）が現れ、自分にとりついた桂子の霊を払ってほしいという。そこに桂子の霊（後シテ）が現れ、桜子の美しさを妬み、桂の立枝を持って打ち据える。恨みも晴れ、桂子は桜子とともに西方浄土に生まれるように回向を頼む。

桂は桜のように美しい花も持たず、また華やかな「春」の桜に対して「秋」の季節感を持つ。それだけに桂子は「飽き」られてもやむを得ないと思って入水するのである。けっして「うはなり妬み」ではなく、地味な桂が派手な姿を持つ桜に対して抱く劣等感による妄執なのである。そして、桂子の霊が桂の枝を持ち、桜子の霊を打つ激しく劇的な場面は、次のように描かれる¹³⁾。

弥生にまた花の咲くぞや、また花の咲くぞや。
見ればよそ目も妬ましき。花のうはなり打たんとて桂の立枝を折り持ちて耳成の山風松風
春風も吹き寄せて吹き寄せて、雪と散れ桜子、
花は根に帰れ。我も人知れずねたさもねたし。
うはなりをうち散らしうち散らす中にうてども・・・

もともと香具山の公成は二人の女性に交互に通っていたのであり、そのときはそれなりのバランスがとれていて平穏だったのである。ところが男の愛情が桜子に移った時、それは自分の容貌の地味な点が原因だと思い込んだ桂子が、桜子の美しさ、ひいては桜子という人を妬むようになったのであった。つまりここでの「うはなり」は「後妻」ということではない。しかし、この「花いくさ」のようなすさまじくも華やかな場面で、劇的效果をさらに高めるためにも「うはなり（打ち）」という言葉が必要だったのである。

「葵上」にせよ「三山」にせよ、もはや「うはなり打ち」は「前妻による後妻への攻撃」という本

来の意味を超えている。奥に秘めた女性の激しい情念（うら）が面（おもて）を着けることによって表にあらわれ、本来なら人を打擲するなどありえないような人¹⁴⁾が行動化することに成功したとき、それが実際に「うはなり」を打つのではなくても「うはなり打ち」と表現されるようになったのである。「うはなり打ち」という音の響きも作用するのか、謡曲は実に魅力的な言葉を獲得したのであった。

4 室町時代物語の「うはなり」「こなみ」

室町時代物語（以下、「物語」という）もまた「うはなり打ち」をししばしば取り上げる。

「磯崎」は、鎌倉時代初期（頼朝時代）の、下野日光山（男体山）のふもとに住む磯崎という武士の話である。磯崎は本領を安堵してもらうために鎌倉に行き、留守番の妻が金の工面などをしたこともあって安堵が叶う。ところが磯崎は下野に帰るに際して女を連れ帰り、館の堀の外に住まわせる。その後、夫が鎌倉に行ったとき、妻は猿楽師から「鬼の面」「半切¹⁵⁾」「赤頭¹⁶⁾」を借り、それを身に着けて女のところに行く。女はとても美しく、妻は老いて色の黒い自分を恥じるが、女が夫の帰りを待つ歌を詠むのを聞いてるうちに怒りがこみ上げ、ついに女を殺してしまう。帰宅して面を取ろうとするが取れず、杖も手から離れなくなった妻は、恥じて裏山に潜んでいる。すると、日光山（輪王寺）の稚児になっている息子が会いに来る。息子は「憎しみを忘れ、黙って座していなさい」と勧め、その言葉に従うと、暁には面も杖も離れた。その後、妻は出家し、殺した女を弔って諸国を歩き、磯崎も自分の過ちだと思い知り、出家して諸国を行脚した。

この妻は留守を預かったうえに金の工面までするという、自分としては精いっぱいの内助の功を果たしたのである。ところがそれを裏切るように夫は女を連れ帰り、恨み言を言うと夫は在原業平や光源氏を気取って許しを請うばかりであった。そして、妻は女を脅すために猿楽師から鬼の面などを借りたものの、女が和歌を詠むなどして夫を慕う様子を見せると妬みが抑えがたい怒りとなり、文字通り鬼と化して殺害に至るのである。つまり妻はそもそも女を殺す気はなく、どういう女かひと目見ようとしただけだったのだが、美しく若い女を見た時の屈辱感、敗北感が、女の和歌を引き

金とし一気に爆発したのである。注目されるのは、妻を救ったのがその実の子であることである。妻を諭すのが単に仏教者でありさえすればよいのなら、行きずりの旅僧でもよいはずである。しかし、日光山の稚児とはいいいながら、より重要なことは、妻（母）をよく知り、現状を冷静に観察し、思ったことを率直に言える存在だったことで、それができるのは実の子のみであったのだろう。少し状況は異なるが、物語の「藍染川」の梅千世も謡曲からはみ出して父の筑紫の妻（つまり梅千世の義母）を理によって救っていた。

罪の重さに尼となった妻のみならず、二人の妻を失い、それは自分の過ちだと悟った磯崎もまた出家するが、彼らは行動を共にすることはない。同じく出家するといっても、思いはそれぞれ別なのである。

「さいき」は豊前に住む佐伯という男をめぐる話である。佐伯は土地の問題で訴訟をするために都に上って清水に参詣し、美しい女と出会い、夫婦となる。女は禁中にも縁があったため、訴訟うまくいく。佐伯はいずれ迎えをよこすといって豊前に帰る。三年経っても音沙汰がないので、女は行脚の僧に文をことづける。佐伯は不在で本妻が手紙を受け取り、その美しい文章に感銘を受ける。本妻は夫に黙って京の女を迎え取らせる。会ってみると実に美しい女で、こんなすばらしい女を忘れるような男を頼りにしてきた自分に愛想を尽かして出家する。その行動に感銘を受けた京の女もまた出家し、佐伯も高野山に登って出家する。

九州の男が京で禁中ゆかりの美しい女に出会い、女からの手紙を男ではなく本妻が受け取るという枠組みは「藍染川」に似るが、そのあとは正反対と言ってもよい展開を見せる。

妻は京の女からの優美な手紙を見て「あらうつくしや、おもしろや」とその優美さに感じ入る。七五調の、掛詞や歌語をちりばめた手紙で、和歌も添えてあったのである。さらに九州に招いた女と会うや、その容貌の美しさにも感嘆する。そして夫が信じられなくなり出家したのである。一方、京の女はその妻の行為に対して「やさしやな。高きもいやしきもねたむならひの候ふに、かやうにやさしき人をいかでか一人置くべきぞ」と言って後を追ひ、同じ庵室に閉じ籠って仏道修行に励んだのである。お互いの素晴らしさを認め合うのは『源氏物語』の紫の上と明石の君を思い起こさせなくもない。こうして佐伯は二人の女に捨てられた

ような結果となり、高野山に登って修行したのである。なんとなく出家の安売りのように見えるが、すべては清水観音の方便であって、彼らは極楽往生して阿弥陀三尊（阿弥陀如来、観音菩薩、勢至菩薩）となって現れたのだという。

「高野物語」は、高野山萱堂に同宿した六人が自分の出家のわけを話していくもので、四人目の「佐々木のせいあみだぶ」の体験談がすさまじい「うはなり妬み」の物語なのである。

佐々木は妻を二人持っていたが、彼女たちはお互いに嫉妬ばかりしていた。佐々木が都に上った時に、本妻が新妻に「妬むのをやめてこれからは姉妹とも思おう」と言った。そして、本妻が新妻のところに僧具を持って行き、酒を飲ませて帰った。酔って寝入った新妻を、本妻は人に頼んで殺させ、地蔵堂近くに埋めさせた。翌日、新妻の姿がないので周りの女房たちが慌てていると、本妻が新妻のところに行き、僧具を指して「昨夜法師がいた。あの人のしわざに違いない」といった。事情を聞いた佐々木はそれ以後、僧をすべてかたきと思うようになった。あるとき僧が宿を借りたいと言ってきたが佐々木は断り、僧はしかたなく地蔵堂に泊まった。すると新妻の霊が現れ、自分が殺された事情を語って証拠の小袖を僧に託した。佐々木はそれですべてを知り、墓を掘り返して妻を見つけた。そこで葬礼を行い、この地蔵堂を庵にしてその僧を坊主としてまかせ、自分は高野山に入ったというのである。

「磯崎」の妻も「うはなり」を殺したが、それは衝動的なものであった。それに対してこちらはきわめて計画的で陰湿な犯行と言わざるを得ない。あらかじめ和解を装い、僧の犯行をにおわせる道具を置き、酒を飲ませ、自分は直接手を下さずにアリバイ作りをして、さらに「僧のしわざだ」と、おそらく悲痛な顔で証言したのであろう。

佐々木には直接的な罪はないのだが、彼には二人の妻を持ったことが引き起こした悲劇だということ後ろめたさがあっただろう。この話には事実が露見したあと、本妻をどのようにしたのかということが記されていない。佐々木にすればもはやそれは意味のないこと、どうしてもよいことだということではなかろうか。佐々木は二十七歳で高野山に入ったと言っているが、この「高野物語」にせよ、次の「きまんたう物語」にせよ、「うはなり妬み」による悲惨な出来事を収拾するには、出家は有効な方法だったのであろう。

「きまんたう物語」は「興福寺の由来物語」とも言われる。

帝の信頼を得ている内大臣には子がなかった。そこで長谷観音に祈ると、美しい姫を得た。姫が成長したある時、帝がこの姫の絵姿を見て心を動かし、後にしたいと願う。嫉妬した中宮は女房と語らって、姫を奪って唐に行く船に乗せて途中で放置させようと企てる。姫は長谷観音の申し子だけに、内大臣は入内させる前に観音に暇乞いをさせようとする。その途中、中宮の計略どおり姫は奪われ、船に乗せられて「きまんたう（島）」に捨てられる。そこで姫は六丈ほどの大蛇に飲まれそうになるが、日課になっている法華経を読むと、大蛇は「自分は震旦の大王の後だったが、妬み心が強く、大蛇になった」と告白し、「法華経のおかげで角が落ちたので、今からあなたを守護しよう」という。都では内大臣が神仏に祈ると、姫は筑紫の島にいるという夢を見て、長谷観音に行くと秋には会えるというお告げもある。関白の北の方（中宮の母）が病気になり、憑坐に乗り移った霊のようなものが「自分はきまんたうの大蛇だ。姫が法華経を読んでくれたことへの恩報じのためにとり憑いたのだ」という。そしてまもなく北の方は亡くなる。それを聞いた内大臣は「きまんたう」に行き、姫を都に連れ帰る。中宮はその噂を聞いて母への孝養のためにもと出家する。姫は后となって皇子を生み、やがて興福寺を建立する。

中宮は内大臣の姫が「うはなり」になるのを阻止するために卑劣な手段で姫をかどわかしたうえで、狼狽する帝や内大臣に対してはねんごろに見舞う振りまでして見せる。殺人ではないものの、「高野物語」の佐々木の妻と同じような冷酷さを持っている。しかし母が大蛇に憑かれて病気になったあげくに亡くなり、内大臣が姫を見つけると聞くとさすがに観念して出家するのである。

この話で注目されるのは、震旦の大王の後の生まれ変わった大蛇である。すでに述べたいくつかの例のように彼女もまた嫉妬が原因で蛇体となるのだが、その告白の中で「八十四人のきさきをうはなりにもちて、あけくれねたむ心ありしによつてかかる大蛇となれり」と言っている。いかにも震旦のことらしく、八十四人というスケールの大きな「うはなり妬み」に苦しんだのである。そして、何の罪もなく中宮に妬まれてかどわかされた姫が、逆に妬みに苦しんだ大蛇を救っているのである。姫はどこまでも観音のように無垢で、人に

施しこそすれ、一切悪意がない。

ところで、継子物である「ふせや物語」に次のような場面がある。継母のたくらみによって継子の「にほひの君」がかどわかされて近江の湖で殺されそうになるところを、亡き実母が亀となって現れて救うのである。「きまんたう物語」とよく似た設定である。市古貞次氏も「きまんたう物語」について「この物語の構想がいかに継子物と類似しているかに注意したい」¹⁷⁾と指摘された。

「桜梅草子」は幻想的な物語である。

春の夕暮れ、美しい女房五、六人が男の家の庭に来て、何も言わずに有明の月の沈むころに帰る。その後また夕暮れに来て、紅梅の薄衣を着た女（梅の女）だけが帰らないので一晩を共に過ごした。さらにその後、梅の女を含む女たちが来て、今度はほっそりとして色白で優美な女（桜の女）に心が移り、その女の袂に手紙を入れる。すると梅の女の顔色が変わり、引き留めても振り切って帰ってしまう。後日、桜の女からいくら忍んで通っても露見してしまうでしょう、という意味の歌が届く。それでも逢瀬が重なるが、三月のある日、桜の女が帰り際に「もう来られない」と言って姿を消す。次の夜の男の夢に、前栽の梅の枝から梅の女が四、五人を連れて杖を持って何かを打とうとしているので、どこへ行くのかを見ていると、そばの御堂の桜のところに行き行って桜の女と散々に打ち合っている。夜が明けて様子を見ると、桜の枝は折られていて、梅も下枝だけが残っている。

謡曲の「三山」のように花いくさの雰囲気がある物語で、春に先頭を切って咲く梅を寵愛したあと、桜を愛でるという自然の時間の流れに沿って進んでいく。

先に関係を持ったのが梅の女なので、いわばこちらが「こなみ」、桜の女が「うはなり」に当たる。そして、嫉妬するのは「こなみ」の梅の女で、当然激しく「うはなり打ち」をおこなうのも梅の女である。注意したいのは梅の女が四、五人の仲間（ということはほとんど最初にやってきた女のすべてが梅の女に味方している）とともに「うはなり打ち」をおこなっていることである。あとで見るように、この当時の「うはなり打ち」は何人かの助太刀を伴って行われるのが常識であり、それを反映しているものと思われる。そしてこの四、五人の女もまたなんらかの花の精なのであろうか。

争いの結果、桜の枝は折られるが、梅もまた下枝のみになったというのだから、桜もかなりの抵

抗をしていることになる。そして主人公の男は、女の正体が前栽の梅と御堂の前の桜であることに気づき「これよりしてうはなりうちとかやいふことは申つたへけん」と悟ったのである。

「火桶の草紙」は老妻の嫉妬の物語なのだが、相手は人間ではなく、タイトルにいうとおり、火桶なのである。

田舎の老爺は、夜は火桶を友として、暁には火桶に歌を詠む。妻の姥はそれを妬ましく思い、老爺が薪を取りに出かけたとき、火桶にさんざん恨み言を言ったあげく、まさかりで割ってしまう。老爺は家に帰ってそれを見るや、姥を殴打する。姥は泣きながらいかに自分が貞女であったかを訴えつつ、夫が火桶ばかり寵愛することを恨む。老爺はあざ笑って、懇々と姥を説教する。すると姥は『源氏物語』の六条御息所や『平家物語剣の巻』の貴船に鬼になることを願った女の例などを挙げ、自分ごとき凡人などは嫉妬したからと言って咎められることではないと反論し、そのうえで来世でも同じ蓮の上にと願っているという。さすがに老爺も納得し、この火桶は成仏得脱の善智識だと言う。

田舎の老夫婦の話ということもあって、嫉妬の対象が火桶というところがユニークである。しかし、夜は火桶を友として、暁には和歌を詠むという行為は、一夜を共にして暁の別れの、あるいは後朝の歌を贈るという、人間の女とのかかわりになぞらえることができるであろう。だからこそ姥は火桶を人格あるもののように嫉妬するのであり、まずは言葉で責め、そのうえで「うはなり打ち」さながらに破壊に及ぶのである。その言葉というのは、昼はそばを離れず、夜は私が夫と一緒に寝るはずなのにお前が夫の懷にあって寵愛されているので「くちをしきことかぎりなし」というもので、さらに「男のわざにはめがたきというて見あへばそのまうちとどむ。ねんぶつ申せ、火おけ」と恫喝するような激しい言葉を投げかけるのである。男なら「妻敵討（めがたきうち）」というものがある、と言って、「うはなり打ち」を「妻敵討」と対照させていることになる。

それに対して老爺は男性原理というべきか、きわめて理屈っぽく、仏教にいう女性の五障や儒教の五常の話などを持ち出す。一方の姥は、反論もするが、結局は一蓮托生を願っていると情に訴えるのである。この姥が現代人なら理屈一辺倒の老爺を見て「寂しからずや道を説く君」とでも言うところであろう。

このように、全体的に滑稽な話ではあるが、その中に男女の思考回路の齟齬や、老夫婦ならではの人情の機微が描かれた佳品と評価されるだろう。

5 江戸時代から見た「うはなり」「こなみ」

「うはなり妬み」はともかくとして、江戸時代になると「うはなり打ち」という行為はあまりおこなわれなかったらしい¹⁸⁾。それだけに「うはなり打ち」とはどのようなものだったのかという関心は持たれたようである。

享保十七年(1732)または十八年に成立した『昔々物語』¹⁹⁾は百二三十年前のこととして「うはなり打ち」の実態を伝えている。百二三十年前というとおおよそ江戸時代の初めにあたるが、滝沢解(馬琴)の『烹雑の記』²⁰⁾は『昔々物語』を引きながらも「元龜天正の比」(1570年から92年)と言い、山東京伝の『骨董集』²¹⁾は「永禄元龜のころ(1558年から73年)までもありし事にやあらん」と解釈している。

『昔々物語』の伝える「うはなり打ち」の内容はおおむね次のとおりである。

百二三十年昔は、「相応打」²²⁾ということがあった。「うはなり打ち」と同じことである。妻を離別したその月のうちに新たな妻を呼び入れたとき、初めの妻が親類縁者から若く達者な女を選りすぐって人数を揃え(身代によって人数は異なる。二十人のこともあれば百人のこともある)、新妻に使いを出す。口上は「御覚悟可有之候、相当打何月何日可参候」。道具は、木刀、棒、竹刀などだが、木刀や棒では大怪我をするので、たいていは竹刀。新妻側は「何分にも御詫言可申」という者もあれば、弱気を出しては一生の恥だからと「御尤相心得、相待可申條、何月何日何時待入候」と返事をする者もある。当日は元の妻は乗り物に乗り、他の女は皆歩き、括り袴をはいて、たすきをかけ、かぶり物や鉢巻きをして、押し寄せる。門を開けさせて台所から入り、手当り次第に壊していく。鍋、釜、障子をこわし、適当な頃に新妻の仲人と侍女郎(新郎の家の門で新婦を迎えて家の中に入れて世話をする役の女)が元の妻の侍女郎とさまざまな言葉を交わした上で帰って行く。相当打に加わるよう頼まれる女は何度も頼まれるもので、七十年ばかり前に八十歳くらいであった老婆が「私は若い頃に十六度頼まれた」といっていた。

以上が『昔々物語』の伝える「うはなり打ち」の実態で、どうやら、江戸時代以前にはこのよう

な形式の整った、女性版の打ち入りのようなことがおこなわれていたらしい。戦うのはすべて女性で、あらかじめ果たし状のようなものを送り、木刀ではなく竹刀を用いるなど、相手にひどい怪我をさせることは避けている。「うはなり」側は、平身低頭して謝罪するものもあれば対抗するものもあった。「こなみ」側の出陣も勇ましく、騎馬武者に徒歩(かち)の兵が追従するような様子である。標的は台所で、直接相手の生命を脅かすのではなく、当時の女性にとって最も重要な仕事場であったと思われ、しかも生活の基盤になるところを破壊する。ところが、ある程度破壊すると仲介役のような人物が出てきて「こなみ」の側は引き上げるのである。こうしてみると、「憂さ晴らし」のような感じがしないでもない。そして、助っ人役の女性には十六回も頼まれたというつわものもいた。この女性は七十年ほど前に八十歳くらいだったと言うから、「うはなり打ち」に駆り出された若いころはほぼ百二三十年前ということになる。「うはなり」側は、損害はあるものの、ある程度は想定したものであろうから、痛み分けという意識だったのではあるまいか。

『昔々物語』のいうところに近い十六世紀末の「うはなり打ち」の例として『葉隠』²³⁾を挙げておこう。

直茂公最前の御前様、御離別以後、うわなり打におりおり御出候へども、陽泰院様御とり持御丁寧候故、納得候て御帰り候事度々にて候よし

「直茂」は鍋島直茂(1538~1618。佐賀藩藩祖)、「最前の御前様」はその最初の妻である慶円、「陽泰院(1541~1629)」は後妻で石井常延の娘である。

直茂の前妻が離別後に一度ならず「うはなり打ち」にやってきたが、陽泰院の応対ぶりが丁寧であったため、そのたびごとに納得して帰ったというのである。直茂と陽泰院の結婚は永禄12年(1569年)のことで、この出来事はそれから間もないことであろう。その時期に、少なくとも佐賀ではまだ「うはなり打ち」が行われていたのである。

浅井了意の『狂歌咄』²⁴⁾に教月上人が諸国を修行していたときのことで「筑紫のある里かたに、女房のうはなりうちをなむしけるをみてよみける 世の中に女の心すぐならば女牛の角やぢやう木ならまし」とあり、九州方面ではうはなり打ちが盛んであったことをにおわせる。また、『狂歌咄』は寛文十二年(1672)の刊行なので、そのころはすでに「うはなり打ち」は過去のものと考えら

れていたようでもある。

江戸時代初期、寛永の初めころ（元年は1624年）に刊行された仮名草子「七人比丘尼」は、貞和（1345～1350）のころ、善光寺如来の前で念仏していた尼のところに集まった七人の尼（主人の尼を含む）が懺悔した話で、その五番目の尼の話は殺人者になるところを救われた「こなみ」なのである。

阿波の菊井右近は京に上って三年ほどして戻ったが、そのとき京の美しい女を連れて帰った。それを知った妻（語り手の尼）は女を「思ひのまに」してやろうと考える。恨みが募るにつれて、妻の身体にうろこができ、眼に光が宿り、口が裂けて額には角のようなものが現れた。あるとき行脚の僧が来たので妻は「女を殺したいのでその方法を教えて欲しい」という。僧は「あらゆる念を放下せよ」と教えた。妻がその通りにすると憎しみについての意味がわからなくなった。しばらくして僧が「自らも他者もなくなったのだ、それこそ真実の憎いものを殺す手立てなのだ」という。妻は夢から覚めたようになり、蛇体からもとの姿に戻ってこの僧の弟子となった。

これもまた嫉妬のあまり蛇体になる話だが、僧の教えによって「憎しみを殺す」ことに成功したのである。

江戸時代の芝居にも一人の男をめぐる二人の女性の話はしばしば見られ、時には喧嘩沙汰になることもある。しかしそれらはたいていどちらかの女性（あるいは双方）が身を引き、あるいは義に殉ずる悲哀がテーマになるのである。

たとえば『心中天網島』では遊女の小春と治兵衛の妻おさんがお互いを思いやり、おさんは実家に戻り、小春もいったんあきらめる決意をしつつ治兵衛と心中する。

『義経千本桜』三段目ではすしやの娘お里が弥助（実は平維盛）にぞっこんになるが、身分違いを知ったうえ、彼には妻の若葉内侍がいたのでその恋をあきらめる。『妹背山婦女庭訓』四段目では烏帽子折求馬（実は藤原淡海）をめぐって蘇我入鹿の妹橘姫と酒屋の娘お三輪がさや当てをするが、お三輪の血が入鹿打倒に役立つこともあって彼女は死んでいく。『新版歌祭文』『野崎村』では久松をめぐってお染とおみつが争うが、おみつは尼になる。『艶姿女舞衣』『酒屋』では処女妻のお園が夫の半七とすでに子までなした仲の三勝に対して、自分さえないなければあの二人は幸せになれるだろうに、と悩み、半七と三勝は心中する。『日高川入相花王』

は道成寺ものだけに激しい嫉妬を見せて恋に狂う女の情念を描く。おだ巻姫という恋人がいる安珍（実は桜木親王）に対して清姫が一方的に思いを寄せて蛇体となって日高川を渡り、道成寺に至る。父の手にかかるが、その死は無駄にはならない。

こうして女たちは嫉妬に迷うことはあっても、なんらかの義理のために身を引いたり犠牲になることで美化されていくのである。

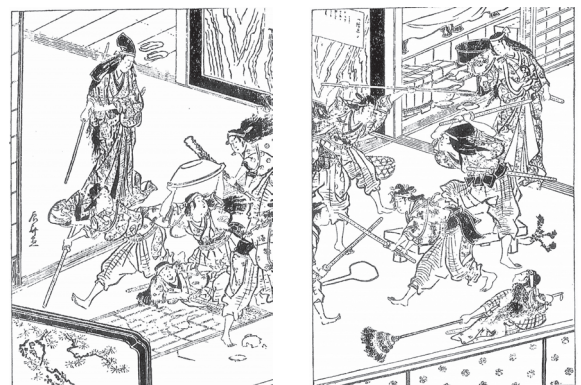
6 江戸時代の絵画

江戸時代には「うはなり打ち」を素材にした絵も見られる。



古画後妻打図（日本随筆大成による）

山東京伝の『骨董集』には「古画後妻打図」があり、「こなみ」が三人の仲間とともにしゃもじ、なべのふた、いかき（ざる）などの台所用品を武器代わりにして左から攻め込み、右側に「うはなり」らしき人物が尼に守られるようにして逃げている。そして右下には「うはなり打を見にあつまれる人のさま也」とあって、野次馬が集まっている。中央下の人物は左手を上げて合図をしているように見えるが、審判役のような人物であろうか。



烹雑の記（日本随筆大成による）

滝沢解の『烹雑の記』にも絵があり、こちらは

竹刀が多く、ほかにすりこぎ、すり鉢、ほうきなども見られる。足元には大根、まな板、ざる、割れた茶碗などがあり、右奥は台所のように見える。この絵にも左右に検分役のような人物がいて戦いを見守っているようである。『昔々物語』などを参考に描いたものであろうか。

このほか、歌川広重にも「往古うはなり打の図」があり、これは二十四人の女性たちが入り乱れて台所用品、掃除用品などを持って争っている。もちろん想像図である。

7 おわりに

鎌倉時代以降の「うはなり」「こなみ」の諸相を、文学作品を中心にたどってみた。ほかにも、歌舞伎十八番の「鰯」や鳥取県大山町の高杉神社のうはなり神事など、触れたいことは多々あるが、紙数が尽きたこともあり、それらは後日の課題としたい。

文献、注

- 1) 片山剛. 「うはなり」「こなみ」の諸相 (1) —平安時代を中心に— 千里金蘭大学紀要 (14) 127頁-138頁 (2017)
- 2) 桃裕行. うはなりうち(後妻打)考. 日本歴史, (35), 42頁-44頁 (1951)
- 3) 大間知篤三. 婚姻の民俗学 (民俗民芸双書 18). 岩崎美術社 (1967)
- 4) 川口素生. ストーカーの日本史 (ベスト新書 90). KKベストセラーズ (2005)
- 5) 川口久雄校注. 新猿楽記. 東洋文庫424. 平凡社 (1983) による。
- 6) きわめてよく似た話が元文五年 (1740) 刊の『女人愛執怪異録』に収められている。
- 7) たとえば金に執心するあまり来世で蛇になる (『今昔物語集』巻十四の四)、嫉妬心を持った梁の武帝の後が大きな蛇に生まれ変わる (『閑居友』下の十)、人を恨めしく思ったため蛇になる (『宇治拾遺物語』巻四の五)、愛執が激しいあまり、蛇になる (『沙石集』巻七の七) など。『大日本国法華経験記 (法華験記)』巻下・第百二十九、『今昔物語集』巻十四の三、『元亨釈書』巻十九にも見える道成寺の話は、能、文楽、歌舞伎ほかさまざまなジャンルに取り入れられる。『今昔物語集』巻三十一の十には「嫉妬ハ罪深キ事也。必ズ蛇ニ成ニケムカシ」とも記される。本稿の最初に述べた『新猿楽記』の本妻についても「生作大毒蛇之身」とあった。
- 8) 市古貞次. 平家物語四 (完訳日本の古典45) 付録. 松尾葦江解説. 小学館 (1987)
- 9) 小島孝之. 沙石集 (新編日本古典文学全集 52). 445頁頭注. 小学館 (2001)
- 10) 橋本孝、天沼春樹訳. グリム童話全集. 94話. 西村書店 (2013)。この物語はカール・オルフによってオペラ“Die Kluge” (賢い女. 1幕12場) にもなっている。
- 11) 佐成謙太郎. 謡曲大観・第一巻. 明治書院 (1963) 226頁
- 12) 北の方は「きうしう (九州) をおひはらはれ、いづくともなく出給ふ」結末を迎える。
- 13) 佐成謙太郎. 謡曲大観・第五巻. 明治書院 (1963) による。
- 14) たとえば「葵上」で「六条の御息所ほどの御身にて」といわれるように、高貴な御息所が人を打つなどありえないことであろう。
- 15) はんざり。能装束の袴。無地の大口に対して華やかな模様が特徴的。鬼神などに用いられる。
- 16) あかがしら。能で用いられる長い赤毛の鬘。悪鬼や妖怪などに用いられる。
- 17) 市古貞次. 中世小説の研究. 105頁. 東京大学出版会 (1955)
- 18) 『骨董集』には「およそ二百年以来、かゝる風俗のあらたまりたるは、いとめでたき事ならずや」とある。
- 19) 原田伴彦他編. 熊倉功夫校訂. 日本庶民生活史料集成・第八巻. 390頁下段-391頁上段. 三一書房 (1969)
- 20) 文化八年 (1811) 刊. 日本随筆大成編輯部. 日本随筆大成・第一期・21所収. 吉川弘文館 (1976)
- 21) 文化十二年 (1815) 刊. 日本随筆大成編輯部. 日本随筆大成・第一期・15所収. 吉川弘文館 (1976)
- 22) これ以後は「相当打」といっており、そちらが正しいのであろう。『烹雑の記』は「騒動打」と表記している
- 23) 相良亨・佐藤正英校注. 日本思想大系26. 三河物語・葉隠. 岩波書店 (1974)
- 24) 武藤禎夫・岡雅彦編. 咄本大系. 第三巻所収.

東京堂出版（1976）

追記

『源氏物語』「竹河」の「世のこととして、数ならぬ人の仲らひにも、もとよりことわりえたるかたにこそ、あいなきおほよその人も心を寄するわざなめれば（世の常として、身分の低い者の関係でも、もともと道理の通った本妻に、かかわりのない人も味方をするようなので）」という一節に触れるべきであったと、校正の時点で気づいた。玉鬘の娘を冷泉院に差し上げたところ、弘徽殿女御（致仕大臣すなわちかつての頭中将の娘）らから妬まれる結果になったことを述べた部分で、世間には本妻に味方するものだという一節である。遅まきながら付言しておく。

